ある宮本氏は、二〇〇八年十二月、本書の刊行をみずして逝去された。しかしその記述から、氏の本書に寄せる意気込みが伝わってこよう。謹んでご冥福をお祈りする。

（八千代出版　二〇〇九年六月刊）

竹野静雄　著
『江戸の恋の万華鏡　好色五人女』

中川　桂

本書は、著者が多年に亙り研究を進めてきた井原西鶴の浮世草子のうち『好色五人女』に描かれる五種の色模様を、一般読者向けに平易かつ興味深く紹介、解説したものである。

『好色五人女』には五組の男女の色恋が描かれているが、それらはおよそ一筋縄ではいかぬものが多い。年若い独身男女の恋愛はむしろ稀で、人妻と奉公人、人妻と隣家の主人とのW不倫、武士と町娘など身分違いの恋愛、さらにサブストーリーとして立ち現れる男色・衆道（同性愛）に至るまで、実にバラエティに富んでいる。これこそ著者が「まえがき」で言う「『恋の万華鏡』たるゆえん」であり、その高いドラマ性ゆえに西鶴作品が今日まで読み継がれているといえよう。

『好色五人女』に登場する五組の色恋は、いずれも事件発生（発覚）当初から歌祭文など俗謡に仕組まれたり、人形浄瑠璃や歌舞伎に取り上げられたりした有名なものであった。しかし本書では、その実説を探ると、実はそれらがほとんど詳らかにしえないものであることが明らかとなる。そのため西鶴の筆は、巷説や俗謡を基にしながらも、浮世草子としていかに面白い読み物に仕立てていくかに注がれた。ゆえに五編の物語には、いずれも西鶴の創作力・脚色力が投影されている。そのあたりの謎解きが『好色五人女』周辺を丹念に調べ続けてきた著者の手腕が発揮される所といえよう。

著者ならではの視点と思われる特徴はいくつかあるが、そのうち二点に触れたい。一点目は心理学の用語を用いた説明である。若い男女「お七・吉三郎」の恋愛では、親の妨害をはじめ身分差も恋の障壁となる。しかし周囲からの妨害が強ければ強いほど熱愛の情が増すもので、これは心理学でいう「ロミオとジュリエット効果」であり、ともにいたいという「親和欲求」が高まることとなる、と説明される。

また、人妻と奉公人の手代「おさん・茂右衛門」（茂右衛門は実説では茂兵衛）の色恋では、若妻おさんが大経師の店を立派に切り盛りする能力をさして、これは「期待のまなざしが人を成長させる、いわゆるピグマリオン効果の現れ」と説く。一般読者に物語の設定を説明する上で、このような心理学的解説は効果的なものと思われる。

特徴のもう一点は、文学研究がともすれば時代区分の枠内でのみ進められる傾向が少なくない中、著者の近代以降の文学や戯曲への目配りが、各話の分析に更なる深みを与えていることである。